

シャルル・ボネの『心理学試論』 ——人間の「魂」の理解について——

飯 野 和 夫

はじめに

18世紀の中葉、パリにあってコンディヤック（1715 - 1780）がその著作『人知起源論』（1746）と『感覚論』（1754）⁽¹⁾でいわゆる感覚論哲学を展開したことはよく知られている。また、『感覚論』においては、人間と同じ潜在能力を持ちながら、順次一つずつ感覚を開かれていく「立像」が方法的に仮定され、その上でこの「立像」がどのように諸観念を持つに至るかが推論され、よって人間精神の諸機能の分析が行われたことも周知のことである。一方、この「立像」の仮定に関しては、ジュネーヴの哲学者シャルル・ボネ（1720 - 1793）が同様の方法的仮定の上に、やはり感覚論に基づいて人間精神の分析を行ったことも比較的よく知られている。いまだボネの紹介・研究が進んでいない日本において、彼はこの業績やアリマキの単為生殖の発見という自然科学者としての業績によって、当該分野においては名を知られている。ボネは、植物の葉の蒸散機能の研究などの生物についての専門的研究の他、有機体論及び自然理論、哲学・道徳論、いわゆる新生論、そして感覚論に基づく「心理学」と幅広い著作を残している。さて、筆者はこれまでボネの思想的著作を順に検討してきたが⁽²⁾、現在は「心理学」の分野について、コンディヤックの思想などとの比較をなしつつ研究を進めている。だが、ボネの「心理学」の内容についてはほとんど知られていない事情を考えると、コンディヤックらとの比較研究をまとめる前に、ボネの「心理学」関係著作の内容をコメントを加えつつ紹介しておくことも意味があると思われる。ボネの「心理学」が展開されるのは『心理学試論』（1754）と『魂の諸能力についての分析試論』（1760）においてであるが（「立像」の仮定が使われるのは後者である）、今回はまず『心理学試論』を取り上げて検討を加えることとしたい⁽³⁾。

ボネの言う「心理学 psychologie」は、現代においてこの語によって意味されるところとは異なり、人間の魂（精神）において種々の観念が生成する過程や、そこに関わる魂の種々の機能を考察するものである。この際ボネは、人間の魂を非物質的で能動性を有する実体と認め、この魂と身体との間に直接的影響関係を認めつつ、感覚論の立場をとって感覚観念からすべての観念が派生するものとした。また、この心的現象の考察を

感覚器官や脳の生理学的考察に基づけた点が、ボネの理論の特徴となる。

『心理学試論』は1754年にまず匿名で発表された。次の『魂の諸能力についての分析試論』においても、ボネは『心理学試論』を他人の著作とし、それに共感を表明しつつ批判も加えるという態度を貫いている。ボネが『心理学試論』を自著と認めることになるのは、1783年、当時刊行されつつあった『博物学哲学著作集』(1779-1783)にこの著作を収録するに当たって付けた「緒言 Avertissement」においてのことである⁽⁴⁾。このようにボネが当初『心理学試論』を匿名としたのは、心的現象に対して生理学的接近を企てたことが唯物論と誤解されるのを恐れていたことと思われる。

『心理学試論』(一卷、全85章)はその前半部(第41章まで)が魂の機能の原理的考察に当てられている。次いで、行為の決定の動機と自由、および決定論的体系の擁護が論じられ(第42章～第60章)、さらに習慣、教育の問題が扱われる(第61章～第85章)。今回は考察の対象を原則として第41章までに限定することとする。

以下、本論文のねらいに沿って、ボネをして語らせるかたちで議論を追うこととした。とはいえ、人間精神の機能をあとづけるという複雑で微妙な課題の故もあってか、ボネの行論は慎重で、時として冗長と思われる場合もある。文体には修辞上の語句も豊富である。そこで、ボネの議論の全体像をよりよく示すために、著作の一部をそのまま引用するよりも、著者なりに枝葉をはらって引用するほうが有効であると思われる場合が多かった。以下、簡潔化して引用した部分は〈 〉で示し、原文の形での引用部分は「 」で示すこととしたい(〈 〉内に「 」を使う場合もある)。引用内の〔 〕は筆者が補ったものである。また、引用箇所の指示は()内のアラビア数字によって、原著の最小区分である「章」を示すこととする⁽⁵⁾。なお、本論文では、コンディヤックをはじめとする他の論者には原則として言及しないこととする。この点については機会を改めたい。

I. 魂の実在の証明

ボネにとって人間の魂(âme)は非物質的で単純な実体であった。この実在の証明を『心理学試論』のボネは唯物論を批判することを通して行っている。

ボネは人間の能力とその諸機能を略述することから始める。〈私たちは考え、意志し、行為する。私たちはさまざまな観念を持ち、観念相互の比較、一般命題の定立、演繹、観念の結合などを行う。また、快や適当や必要の感じ(sentiments)からある対象を欲する(désirer)ようになり、逆の感じは対象を忌避させる。この結果、私たちは意志を持ち、身体にいわば命令して身体行為をなす。さらに、こうした事柄がすべて自らの自我の内で行われるのだと感じる(sentir) (35)〉。

次いでボネは、物体がこれらの能力を持つことができるかどうかの検討に移る。〈これらの能力は人間の内にしか存せず、従って物体に本質的な属性ではなく、〔物体に由来するとしても〕せいぜい物体〔身体〕の属性から派生する様態 (modes) でしかない。しかし、思考 (pensée)、意志 (volonté)、自由 (liberté)〔起動能力〕⁽⁶⁾は、物体の私たちに既知の諸属性〔ボネは延長、固さ、慣性力を挙げる〕とは全く無関係で、両立させることもできず、私たちはこれらの能力を物体の様態として考えることはできない。〔観念をもたらす〕知覚にしても、知覚の主体が物体で延長を持つならば、延長上の各点における知覚が表示する対象を一度に見ることはどうして可能なのか。これらの知覚の自覚はどのように成り立つのか (ibid.)。本論文では立ち入れないが、ここで述べられることは当時唯物論を批判する場合に常套の内容で、コンディヤックらにも同様の議論が認められる。

ボネは予想される反論にあらかじめ答える形でさらに補足している。思考や（行為を起す）起動能力も私たちの知らない仕方では物質の内に存するのではないか、という反論が考えられるが、ボネはこう答える。〈慣性力、重力、運動など物質の諸力⁽⁷⁾も確かにそれ自体の本性は知られていないが、それらは物質の諸性質と確実に不変の関係を持っている。だが、思考や自由〔起動能力〕の場合、物質の諸性質と無関係なばかりか、矛盾すらしている (36)〉。こうしてボネは物体の私たちに知られた諸性質諸属性を相互に不変の関係を保つ客観的なものとして受け入れ、それを判断の基準としている。私たちは、物体が私たちとの関係において現れる姿しか知りえず、その意味で「名目的 nominal」本質を知りえるのみだが、〈「名目的」本質を構成する諸属性も実在的 (réel) 本質に根拠を持つ。よって、未知の諸属性があったとしても〔同じく実在の本質に根拠を持つので〕既知の「名目的」諸属性に反することはできず、〔物体の既知の諸属性に反する〕思考や自由は物体の未知の諸属性から派生したものではありえない (ibid.)。以上のような立論に対しては、私たちは、既知とされる諸属性を固定してとらえず、さらに検証する必要があるだろうが、ここでは一応ボネの立論を認めて先に進もう。

ボネはまた、神とても事物の本性を変えることはできないとし、神が物体に思考能力を与えないとすることは神の能力を制限することだとする意見に反論している。こうしてボネによれば、〈物体以外に私たちの諸能力の原理を求めべきである。その原理は能動的 (actif)・単一 (simple et un)・非物質的 (immatériel) であるはずであり、それが人間の魂である。魂の「実在的本質」はやはり知られず⁽⁸⁾、魂はその諸能力〔諸属性〕を通してのみ知られる。つまり、知性 (entendement)、意志、自由〔起動能力〕であり、延長、固さ、慣性力が物体の諸属性であるのに対応している (ibid.)。〉

ボネは当時の思想界の状況を念頭に、唯物論と唯心論をともに退け、魂（精神）と物体の二実体を認め、人間をこれら二実体の結合したものとする。〈より賢明なのは中間

の説で、物質と諸精神の存在をともに認める立場である。この説は物質と精神からなる「混成存在 être mixte」を認め、人間をその中に位置づける (34)。

では、このような非物質的実体として理解された魂の能力の検討に移ろう。

II. 魂の諸能力

前節の引用では、魂の能力は「思考 (知性)、意志、自由」としてまとめられていた。ボネは魂の働きの原理的考察に当たった『心理学試論』前半部の最後の章 (第41章) で魂の能力を3つに分類しているが、この分類にそって魂の能力を検討することとしよう。

魂の能力は、まず第一に「認知能力 faculté de connaître」であり、この能力は「感覚能力 faculté de sentir」、「表象力 force représentatrice」あるいは「知覚能力 faculté d'apercevoir」とも呼ばれる。この能力に基づく魂の働きが「感覚すること sentir」で、これは「物的対象 (objet) が脳に引き起こす運動を契機として、魂が〔対象の〕渾然たる諸知覚 (perceptions confuses) を持つこと」である。そして「あらゆる感覚 (sentiment) は一つの観念であるか、観念の集まりである」ともされる (以上41)。一方、観念とは「魂の変様 (modification) であり、この変様はある状態で存する魂自体に他ならない」 (38) ⁽⁹⁾。

こうして、魂はまず感覚を介して観念を獲得する。では、こうした感覚ないし知覚を得る際に魂は全く受動的なのであろうか。ボネの答えは次のようである。〈全く受動的 (passif) で反作用を持たない存在に対する能動的存在 (être actif) による作用 (action) は考えられない。脳における運動の際に〔運動を契機として〕、魂の能動的活動性 (activité) が私たちには知りえない仕方で発揮される。その結果として観念ないし感覚が形成されると考えるべきであらう (37)〉。外的対象から感覚器官を介して脳に至る運動が、魂の活動にどのように関わるかの内実は知られていないが、ボネはこの身体と魂との相互関係も一般的に「作用」関係にとらえ、能動性を持った存在 (いわば自立した存在) 相互に成立する関係と見なしている。ボネはマールブランシュ流の機会原因論の立場——物体と精神の直接的相互作用は不可能として、両者の関係を神の作用に基づき、被造物から能動性自立性を奪うことに通じる立場——はとっていない。

後に見るように、この第一の能力は実はすでに判断を含んでおり、「思考」や「知性」の能力と一つになっている。その意味で、前節で魂の能力がまず「思考」ないし「知性」であるとされたことと符合している。以下、第二、第三の能力はそのまま前節の内容と一致している。

魂の第二の能力は「起動能力 faculté de mouvoir」であり、ボネはこれを「自由」の能力とも呼んだ。この能力に基づいて魂はまず〈脳に対象が引き起こすものと同様の運

動を印刻する(imprimer)》(41；以下、本節では指定箇所以外は第41章)。また、魂の起動力はすぐ次に見るように、脳のみならず一般に身体に運動を生じさせる能力と考えられている。この〈魂の起動力(force motrice)は意志の指示に従う〉とされる。

第三の能力は「意志能力 faculté de vouloir」である。この能力は〈認知能力を前提とするが、必ずしも起動力は前提としない。魂は自己の起動力を越えたものも欲する〔意志する〕(vouloir)ことができる〉。

ボネは併せてこれらの3能力の特徴に言及している。まず、魂の認知能力の特徴と限界について。

「感覚器官(sens)からの魂への作用(action)」は外部の対象の知覚をもたらすが、この作用は「感覚器官の仕組みや働き方については観念を与えない」。一方、「魂が作用〔起動力〕を働かせる場合、そのことを意志し、かつ知って〔自覚して〕いる」。例えば、「腕からの脳〔そして魂〕への反作用によって、魂は腕を動かしていると感じる(sent)」。だが、身体部位に作用を及ぼしてはいるものの、〈作用する身体部位の仕組み(la mécanique et le jeu)は〔その仕組み自体からの反作用がないので〕分からない〉。また、〈魂は自らが作用する仕方は分からない〉。

一般に、「魂は感覚器官を通して〔作用(ないし反作用)を受容して〕のみ認識をする」。これは明確な感覚論の主張であり、人間の認識は、反省的なものでもすべて感覚界からの抽象によって成立することになる。ところで、「感覚器官は物体に関わるものとしか関係を持たず、一方、魂〔それ自体〕は物体に関わる何ものでもない」。よって、「魂は自身を認識することはできない」。「私たちは魂をその諸能力をとおしてのみ知り、この諸能力はその〔顕在化した〕結果から知るしかない」(Introduction)のである。

また、魂の起動力と意志能力との作用の範囲の差について次のように語られる。

〈魂の起動力は意志の指示に従うが、それはある限度までで、またある特定の運動についてのことである。起動力はある身体部位に作用するときには、隠された法則(une loi secrète)に従い、その結果いかなる意志や感覚(sentiment)からも独立したものとなる。消化、循環、分泌、成長、生殖などの運動がこれである。(・・・)これらの運動は脳に対して反作用を及ぼさず、魂はそれらについて何の観念も持たないのである。それでも、これらの運動は魂の起動力の結果でありえよう〉。

さて、私たちの考察の対象となる『心理学試論』の前半部は魂のこの三つの能力をそれとして分析するわけではない。魂の実際の諸機能はむしろ身体を前提とした上で、三つの能力の協働によって実現されるように思われる。ボネは魂のこうした諸機能を解明しようとする。その際、魂の三能力と身体的要素とが連携し、その連携のあり方によって多くの機能が実現すると見ることによって、ボネは魂の働きを彼なりに「構造化」することに成功している。つまり、魂の諸機能を前にして思考停止するのではなく、それ

らの諸機能をより基本的な諸原理へと分析可能なものとしたのである。さて、魂の諸機能のうち主要なものはなによりも観念を持つこと、そして観念のさまざまな変様形態を持つことであろう。そこで次節より、観念に関わる魂の諸機能についてのボネの分析を検討することとしたい（0から8までの分類は筆者が行ったものである）。魂にはさらに意志に従って身体運動を実現する機能があるだろうが、これについては第Ⅶ節で検討することとしたい。

Ⅲ. 観念に関わる魂の諸機能

0. 感覚(sensation)、観念(idée)

ボネは『心理学試論』を観念に関わる魂の諸機能の概略を示すことから始めている（以下 Introduction より）。彼によると「魂が観念を獲得するのはただ感覚機能(sens)の助けを借りてである」（強調は引用者）。こうしてボネは冒頭より明確に生得観念を否定する。具体的には、「物的対象が〔感覚器官を介して〕脳〔の繊維〕に印刻する運動に、魂の中で観念がつねに対応する」ことになる。ただし、この心身結合の仕組みはいまだ私たちには明らかになっていない、とされる。

次いで、「魂は抽象的な観念をその記号となる言葉を使用することによってのみ形成する。〔この言葉は知覚(感覚)されねばならないから、結局この言葉〔の使用〕によって抽象的観念も身体の働きに依存していること(corporéité)が分かる」とされる（本論文第Ⅳ節末尾参照）。ボネによれば、〈観念の再生も〔脳の〕運動に依存している。魂が〔脳に達した〕感覚繊維(fibres des sens)に、対象が以前に引き起こしたのと似た運動を引き起こす。すると、この運動に結びついた観念が再現されることになる〉。

ところで、ボネの「心理学」の特徴が、心的現象に生理学的接近を企てたものだということにはすでに触れた。その際、ボネは、当時の解剖学の知見に基づいて、感覚器官と脳を結ぶ「感覚繊維」を抽出している。そこで、ボネの理論を理解する上で重要な「感覚繊維」の概念についてあらかじめ触れておきたい。この「感覚繊維 fibres sensibles」という語は実際には『魂の諸能力についての分析試論』で使われ、『心理学試論』においては「繊維 fibres」ないし「神経繊維 fibres nerveuses」とされ、上に引用した箇所だけで「感覚〔の〕繊維 fibres des sens」とされるが、実質は同一のものであり、本論文では機能をよく示す「感覚繊維」の語を主として使用することとする。

感覚繊維はまず「神経繊維」（1、21）として感覚器官に分布する。一つの感覚器官は多くの繊維を備えていよう。ボネは明確には語らないが、こうした感覚繊維は感覚器官から発して、順次つながり合って脳に至り、脳内の繊維に接続するらしい。ボネは「繊維」という言葉を、場合によって感覚器官における繊維にも、脳内の繊維にも適用して

いる。物的対象（あるいはそこから発する微細な粒子）が感覚器官に分布する感覚繊維に運動を与え、その運動は繊維を通じて脳にまで至る。感覚繊維は種々の感覚器官の運動をすべて脳に伝達し、脳において繊維相互の連絡づけもすると考えられたらしい。

魂の変様としての観念の生成のあり方自体は私たちには知りえないが（第Ⅱ節参照）、脳の繊維の運動に魂の中で感覚観念が対応していることが推測される。そこで、感覚繊維の機能について推論することは、観念の生成の考察に資するところがあると考えられたのである⁽¹⁰⁾。今後、魂の機能の分析の折々に、感覚繊維に言及されるのが見られるであろう。ただし、『心理学試論』の段階では、この繊維の機能の考察はいまだ観念の考察と平行させて体系的になされるには至っていない。

繊維のあり方自体については、『心理学試論』においては、大略次のように語られる。〈感覚には主要な五種〔五感〕があり、そのそれぞれが無数の「種類」を含む。対象からの印刻は五感それぞれで異なる運動の形をとり、それに対応して各感覚器官(sens)の繊維も違いを持つ。では、一つの感覚器官の神経繊維は、その感覚器官の感覚の多様性に対応するだけ多様なのだろうか。触覚、味覚、嗅覚については、それぞれの感覚器官の神経繊維は均一だが、それらの繊維はさまざまな印刻に対応してさまざまに運動し、多様な感覚を生み出すと思われる。一方、聴覚では、内耳に音階の七音に対応する異なる長さの聴覚繊維が分布しているだろう。視覚においても、目の網膜や視神経は七基本色に対応する異なる繊維を備えていると思われる。また、この七つの主要繊維はさらにさまざまなニュアンスに対応する小繊維から構成されているだろう（21 - 26）〉。

こうして、感覚の多様性に対応した多様性が、感覚繊維とその働きにもあるはずだと考えられた。当時、生理学はいまだ実験科学として十分な成果をあげるに至らず、したがって繊維の機能についての仮説も生理学によって検証されるには至らなかった。ここでは、私たちに知られる感覚のあり方に合わせて、繊維のあり方が全く論理的に要請されている⁽¹¹⁾。だが、ここで注目すべき点は、繊維のあり方がどのように考えられたかではなく、ボネが脳の繊維の仮説を一つの重要な手がかりとして魂の機能の論理的分析に手をつけたこと自体にあると言えよう。

本編に入ると、人間の魂の諸機能が胎児の状態から働き始めて成長していくものであるとの見解を示した後、ボネは直ちに観念に関わる魂の諸機能の分析にとりかかる。以下、ボネが言及する順にほぼ沿って、その分析を検討してみよう。

1. 想起(rappel)

ボネによると、誕生後の魂は感覚をとおして順次観念を獲得していくが、〈ある観念は特定の他の観念といつも結びついて生じることなどから、観念間に連関(liaison)が成立する。この連関に従って、ある観念は他の観念を想起させるようになる。これは、物

的対象が生じさせた運動と同様の運動を脳の繊維に引き起こすように魂の「起動力 force motrice」が作用することによる(4)) (強調は引用者)。ここで語られる「観念間の連関」が18世紀にしばしば論じられた「観念連合 association (ou liaison) des idées」であることは言うまでもない。ボネはさらに補足する。〈一つの観念を契機に、魂は他の観念の漠然とした印象を感じ、それを想起しようと起動力を使用する。観念間の関係は〔脳における〕繊維のつながりに依拠しており、起動力は繊維のつながりに沿って作用し、他の観念を想起させる(6)〉。

想起は具体的な個物の観念も対象とするから、個物の観念もすべて脳の繊維の変様として保存されていると考えざるをえない。感覚器官の段階では感覚の「種類」を担った「感覚繊維」も、脳において想起の基礎となる場合には、個別の具体的な観念をも担っているように思われる。

2. 想像(imagination)

一方、〈物的対象が生じさせる運動と同様の運動を引き起こすように魂の起動力が作用する場合は想像と呼ばれる。ただし、物体による印刻はふつう魂の起動力による印刻より持続し鮮明である(4)〉(強調は引用者)。

〈想像において、魂は起動力によって諸感覚器官に対応する脳内の部位に働きかけ、各種の感覚観念に適合するように脳の繊維を操作する。魂は、例えばある球の形を再現する(retracer)のに、一連の視覚繊維をそれらの中心のものから縁のものへと徐々に運動が弱まるように動かす。球の色に適合する繊維⁽¹²⁾を振動させることで魂はこの像に着色する。間や周辺の物体の像を再現して、距離や状況の観念を再生する。運動の知覚の再生(reproduction)には、球の像が通過する線上の繊維すべてに、球の形、色、大きさを再現する運動を順次与える。こうした再生は対象のすべての特徴を含む全体としての再生である(27-29)〉。触覚、味覚、嗅覚、聴覚の再生も同様である、とされる。

この引用は「想像」について語られているが、観念の再生の仕組み自体は「想起」においても同様であろう。この部分は魂が脳の繊維に生じさせる「運動」についての具体的な記述の一つだが、それでも繊維の運動のあり方が明確なイメージを結んでいるとは言いがたい。また、上の引用に続いて「想像」の文脈の延長でも「観念連合」について語られる。〈一度に作用した諸感覚(sensations)の内の一つを想起〔想像〕しようとする、随伴する感覚も同時に再生される。一つの感覚機能〔例えば視覚〕の一つの知覚でも同様である。すべての観念はつながっているから、こうした再生には果てがない(29)〉。だが、魂がいかにして上のようなさまざまな運動を正確に行うのかについては、ボネ自身も私たち人間には知りえないと認めている(30)。

また、この項の最初の引用でもふれられたが、魂の想起(想像)する知覚は、対象の現実の感覚に対して強度において及ばないとされる(20)。ただし、魂が全面的に自己

の内部の印象にゆだねられている夢想 (songs) の状態においては現実の感覚に匹敵するとされている (ibid.)。

3. 覚え (réminiscence)

この現象についてボネは次のように語る。〈初めて振動させられた繊維が魂に生じさせる印象は、二度目に振動させられた繊維による印象と厳密に同じではない。同じ振動の繰り返しによって繊維の柔軟性は増すが、このことに基づく感じ (sentiment) が覚えとなり、感覚に付随する (5)〉。この現象は、魂の受動的な側面において成立するようと思われる。また、一つの観念が再現されると関連する他の観念を想起させるが、このことから覚えの意識が生じるとされるが、この意味するところは明確ではない (ibid.)。

4. 快と苦 (plaisir; douleur ou déplaisir)

〈魂は対象の印刻の感じ (sentiment) を持つ。すなわち、あらゆる感覚 (sensation) は快苦 (あるいはそれらの均衡) の感じを伴う (8)〉。ところで、快苦には一般に、〈感覚能力 (faculté sensitive) に関わる身体的快苦 (des plaisirs et des douleurs physiques ou corporels)、主に知性 (entendement) や反省 (réflexion) に関わる精神的 (spirituels) 快苦、そして前二者の性質を併せ持つ混成的 (mixtes) 快苦——想像の快苦はここに含まれる——の三種があり、それぞれ子供、分別ざかり、若者に特徴的である (65)〉とされる。また、身体的快苦については、繊維が穏やかに振動させられる場合が快であり、繊維の構成分子を引き離すほど振動が激しい場合に苦が生じると推測される (ibid.)。精神現象はすべて身体的基盤を持つので、知的観念もそれに関わる繊維を持つことになろうが⁽¹³⁾、精神的快苦や混成的快苦も繊維の運動やその調和などに基づくと考えられよう。

この快苦は、次節で見ると、注意 (観念に関わる魂の諸機能の前提となる) や欲求 (行為への意志の前提となる) といった魂の重要な機能を導く原理となるもので、人間を導く本源的な原理とも言うものである。

魂はまた「哀れみ、同情、不安、恐怖などの情動 (mouvements)」(29) をも持つことになるが、『心理学試論』においてはこれらの情動について考察されることはない。だが、魂の起動力による感覚の想起と〈同じ仕組みによって哀れみ、同情、不安、恐怖などの情動をも想起しうる (29)〉とされている。

さて、観念に関わる魂の機能には、さらに

5. 注意
6. 欲求、決意
7. 表現
8. 言葉の使用

を挙げることができよう。だが、「注意」や「欲求、決意」に関するボネの論述を検討すると、これらの機能にはそれ自体の内にすでにある種の《判断》が含まれていると考

えられる。そこで次節では、これらの機能の検討を通して《判断》の機能を抽出し、さらに「感覚観念」自体が含む《判断》の問題へと進むこととしたい。なお、人間を特徴づけるものとして重要な言語活動とそれに基づく「判断」については、第Ⅴ節でまとめて検討することとしたい。

Ⅳ. 魂の諸機能と判断

まず、前節に続けて観念に関わる魂の機能を検討し、そこにすでに知的能力が発動されていることを検証しよう。

5. 注意 (attention)

この機能についてボネは次のように語る。(ある対象に対応する繊維に〔起動力によって〕反作用を加え、その繊維の運動を強め持続させることで、魂は対象の印象を強めることができる。この能力が注意である (7))。

この注意は、魂が対象の観念に働きかけようとするとき、つねに前提として考えられるもので、想起や想像においても作用していよう。次節で見るとような言葉の使用によって開かれる魂の諸機能も、その行使は注意の作用を前提とすると思われる。この注意の機能さえ持てば、魂は、言葉を欠いていても「注意による部分的様態的抽象 *abstractions partielles ou modales*」、つまり注意を集中することによる対象の部分や様態の分離、をなしうる。ただし、言葉を欠いた魂は具体的な個体の観念 (個別観念) しか持たず、いわゆる抽象観念は欠いたままであるとされる (8)。

注意には魂の起動力が働き、したがってその起動力の発動には「意志能力」が関与していることになろう (第Ⅱ節参照)。では、この注意の行使とその方向 (対象) を決定する原理は何なのか。ボネは「魂は知覚それぞれの強さや意義 [面白み] *intérêt* の程度に応じて注意を向ける」(39)と語っている。まず、強い知覚にはおしなべて注意が向けられよう。次いで、「意義 [面白み]」のある知覚ということに関連しては、「注意 [の発動] は、個体の保存と安楽 [快] に関してのある対象の密接性ないし重要性に比例する」(ibid.)とされている。ボネは明言しないものの、ここでは、魂が自ら注意を向ける際に、「個体の保存や安楽」に関しての対象の「密接性」や「意義」について、言語の使用以前のいわば感覚的段階の《判断》が働いていると考えるべきであろう。「個体の保存」は「個体の安楽」の概念に統合しうるようにも思われ、注意を引きつける原理は、結局、安楽ないし快であることになろう。また、「能力」の観点から見ると、注意に関わる意志能力は「感覚=認知能力」を前提としていたから (第Ⅱ節参照)、この「感覚=認知能力」がすでに《判断》の能力を含んでいると言えるかもしれない。

6. 欲求 (désir)、決意 (se déterminer)

ボネは次のように語っている。〈快 (plaisir)、適当 (convenance)、必要 (nécessité) [といった動機] から、ある対象を所有したいという欲求が生じ、それを実現するために私たちは [身体行為を] 決意する (nous nous déterminons) (35)〉。また、「子供は、反省なしに、自らの目下の状態——つまり自らの必要 (besoins) や安楽 (bien-être) ——と関連する [対象の] 印象に従う (céder à)」(8)。つまり、こうした対象の所有の「欲求」は、次節で見るとような言語の使用を前提とする「反省」より以前の、魂の本源的な機能であろう。

「欲求」が「快、適当、必要」によって規定される以上、ここにも、すでに対象のもたらす快 (安楽) や対象の必要性について感覚的段階の《判断》が働いている、と考えられよう。事情は前項で見た「注意」の場合と似ている。「適当」や「必要」については詳しく語られないが、これらの概念は「快」をもたらす条件でもあり、結局「快」の概念に統合されるようにも思われる。欲求が生じる原理も、注意を引きつける原理同様、快であることになろう。この「欲求」にも「注意」のように魂の起動力や意志能力が関与しているかどうかははっきりしないが、少なくとも「決意」 (= 「意志 volonté」) に至れば意志能力が関与するはずである。結局、「注意」の場合と同じくここでも、意志能力の前提となる「感覚=認知能力」がすでに《判断》を含み、その上で「欲求」が形をとり、「決意」に至るのではないか⁽¹⁴⁾。

さらに、本論文の原則的な対象範囲からは外れるが『心理学試論』第46章では「情熱 passion」について語られる。「情熱」は、魂と身体の運動との相互作用が自律的に昇進して観念が鮮烈化し、それにつれて対象に対する「感覚的欲求」が活発化する事態であるとされている。

また、ここに見る「欲求」と「決意」を基礎とし、そこに第V節の②で見ると「反省的な判断」が加わることによって、人間のいわゆる《意志決定》の場面が形作られるのだと思われる⁽¹⁵⁾。

以上、「注意」や「欲求、決意」の機能において快苦などの《判断》が働いているであろうことを指摘したが、ここでボネにおいては感覚観念自体も《判断》を含むものであることを見ておきたい。感覚観念の内、「形態、大きさ、距離、状況、運動」などの観念は、対象についての言語以前のさまざまな《認識》や《判断》を含んでいると思われる。ボネは二章を割いて視覚の観念を題材に大意次のように語っている。

〈魂がさまざまな対象やその部分のあり方を知覚するためには、物体からの反射光によって網膜上に光の点が生じ、その点の固有の持続的な運動が脳に伝達されればよい。形態、大きさ、距離、状況、運動は視覚観念の内のいわば上位の種類をなし、それぞれ

が無数の下位の種類を含むが、この視覚観念のそれぞれの種類は脳内に専用の繊維を持つわけではない。ある物体の両端から発した光線が水晶体で交差して作る角の開きがこの物体の見かけの大きさを決める。絵などの見せかけと現実のものとを区別しうるのは、触覚や、周辺の物体についての認識 (connaissance) による。一方、距離の観念は間に置かれた物体の広がりから形成される。また、反射光が弱い場合も、その対象は遠いと判断 (juger) される。周辺の物体との位置関係が絶えず変化するとき、その物体は運動していると判断される。網膜上の像の位置が変化しても運動しているように見える (paraitre) (27 - 28) (強調は引用者)。

物体を正しく認識するためには、「周辺の物体」ととの関係を把握したり、「触覚」など他の感覚と比較したり、状況を「判断」する必要がある。「認識」、「判断」などの言葉が使われることから、感覚観念が生じた段階ですでに魂はある知的能力を発動していることが分かる。「形態、大きさ、距離、状況、運動」などの観念自体が、対象についての言語以前のさまざまな《認識》や《判断》を含んでいると思われる。「能力」の観点からは、これらは「認知能力」に他ならない「感覚能力」に属するであろう (第II節参照)。

さて、ボネは「魂は複数の観念を同時に存する〔存在させる〕のか？」(38) という問いから複合観念の問題に導かれる。上に見た「形態、大きさ、距離、状況、運動」などの観念も複合観念に他ならない。以下、長くなるが、第38章でボネの語るところを見て、複合観念という視点から《判断》の問題を捉えなおしてみよう。

〈私たちの観念は「単純」か「複合」されているかで、厳密には「一つ」なのは単純観念 (idée simple)⁽¹⁶⁾のみである。従って、諸観念が継起する中で人がある複合観念 (idée composée) を持つ場合、複数の観念を同時に存することになる。例えば、球体を思い浮かべると、丸さの観念と同時にその色の観念も思い浮かぶ。色のない球体はむしろ一つの抽象観念である。

〈こうした複合観念はいくつもの判断を含んでいる。例えば地球を具体的に思い浮かべると、私は次のような命題の〔命題を含意した〕イメージ〔=複合観念〕(une image de toutes ces propositions) を持つことになる——「地球は丸く、人が住み、海と陸とからなる、云々」。各瞬間に精神を占めるのは一つの観念だとしても、この観念は極めて複合的であり、判断とは、主語 (sujet) の複合観念〔この場合、地球〕の内に属性を示すそれぞれの観念が含まれているかどうかの知覚なのである⁽¹⁷⁾。

〈ところで、記憶などを分析すると、一度脳に入った観念は、判明さに差があるとしても、そこにずっと保存されることが分かる。人間の脳あるいは精神は、一度知覚されたおびただしい観念の保存庫なのである。あるいは、〔観念は相互に結びついているから〕極めて複雑な一つの観念となったものの保存庫とも言えるかもしれない。この複合観念

が判断を潜在的に含むのである。

〈保存される観念はいつも自覚されているわけではない。だが、フランス王のことを考えていないつもりでも、実際にフランス王に会えばすでに知っていると分かる。だから、フランス王の観念は気づかれないほど微弱ではあれすでに精神の内に存したのである。他方、魂の現在の状態と過去の諸状態との結びつきの感覚 (sentiment) から「人格 personnalité」が生じることになる。〉

〈一つの観念を強めて鮮明にする能力が注意と呼ばれるのであった。強い観念しか私たちが考えないことから、「観念は注意を向けられたときしか存しない」と言われる。注意には程度が存し、また精神によって注意能力に差がある。よって、いくつの観念、どれだけの範囲に同時に注意を向けられるかは場合による。知性的観念が注意の対象である場合も、例えばある証明の過程において、私たちは同時に複数の命題を、鮮明さに差があるとしても精神にとどめている。一つの結論に達するときは、先行するすべての論証の知覚 (sentiment) を判明にではなくとも保持しているのである。〉

〈魂が同時に多数の観念を持ちうることはむしろ魂の「単一性 simplicité」を示しよう [本論文第Ⅱ節参照]。(38)〉

こうして、ボネ自身の言葉によって、複合観念の存在、それが判断を含むこと、その保存のされ方などが明瞭に語られている。魂（精神）の変様としての「感覚」、「観念」はボネにあって豊かな概念であった。だが、この言語使用以前の知的能力自体や、次に見る言語の使用との関係などがこれ以上掘り下げられることはない。

V. 言葉の使用

観念に関わる魂の主要な機能にはさらに次の2つを考えることができよう。

7. 表現 (exprimer)

これについては、〈魂は、音、身振りによって感じ (sentiments) を表現しうる〉とされている (8)。この機能は次に見る言葉の使用の起源ともなろう。

8. 言葉の使用

人間を特徴づけるものはその言語活動であり、ボネもそれには重大な関心を払っている。ボネの論述においては「言葉の使用」については他の機能と一緒に論及されるが、本論文では以下でまとめて検討することにしたい。

言葉の使用の持つ意味を考えるに当たり、ボネは言葉を欠いた魂の状態の特徴をまず分析している (8)。言葉を欠いた魂もこれまでに見た0から7までの諸機能を持つが、言葉を使用する魂と比較すると次のような特徴を持つとされる。〈言葉を欠いた魂にとつては、あらゆる知覚 (perceptions) は全く感覚的 (sensibles) で、それらの知覚はそれらが

生じた仕方に起因する〔自然的な〕連関しか持たない。したがって、想起については、言葉を欠いた魂が現に感覚観念を持ち、その感覚観念が自然の連関を他の感覚観念と持つ時のみ、この魂は他の観念を想起しうる（8）。この魂は想像の能力も持つが、その場合も、観念間にはあらかじめ自然的な連関が成立している必要がある。

それでは、こうした言葉を欠いた状態から魂はどのように言葉を獲得し、どのような新しい機能を獲得するようになるのか。言語の起源についてボネが示す「理性の教える見解」によれば、〈差し迫った必要 (besoins) によって発せられる声や叫びが、この欲求の人為的記号 (signes d'institution) となる (18)〉。つまり、言語は「必要」とその「表現」の機能にその起源を持つ。〈動物も感情などの自然的表現を持つが、人間の発話とは特に分節音 (sons articulés) を観念に結びつけることである (19)〉。こうして生じる言葉は、それが指示するものと必然的關係を持たない「恣意的記号 signes arbitraires」(8) である。一方、〈絵画から文字が誕生し、これが分節音のさらに記号となる。言語にはさまざまなものがあるが、ある言語を話す民族の器官の素質や精神の傾向が言語にも反映されている (18)〉とされる。

さて、〈この言葉の獲得が意味するところは、対象 (objet) の観念に〔それと必然的關係はない〕単語の観念を結合することであり、その結果この二つの観念は相互に想起しあうようになる。単語〔分節音〕の観念には〔それと必然的關係はない〕ある文字の観念がさらに結合されるようになる (10、11)〉。〈理性の発展に伴い記号は簡略化されつつ、より多くの事物を表示できるように〔記号体系として〕発達していく (18)〉とされる。

では、こうした言語を獲得することで魂はどのような具体的機能を持つようになるのか。言語を活用することで、人間の魂は「理性を享受しうるようになる」(12) とされるが、それはどのような機能としてなのか。以下、ボネの記述から機能を抽出し、検討を加えよう（ここでも分類は筆者による）。

① 抽象 (abstraction)

言語を使用することで魂に可能となるものは、まず「包括的抽象 abstraction universelle」である。ボネによれば、人はこの抽象によって、「ある主体から他の多くの主体と共通するものを分離し、当の主体に固有のものだけを把握する」ことができる（8）。勿論、逆に共通のものに目を向けることもできよう。「ある特定の対象を指し示すために『人間』という言葉を使うと、同類のあらゆる対象が同じ言葉によって表示されることになろう。（・・・）ある人の個別観念 (idée particulière) から、個別的偶然的なところを分離し、〔類似の存在と〕共通で本質的なものだけを残す〔抽象する〕と『人間一般』の観念が形成されるだろう」(12)。共通の諸性質の複合観念（あるいは諸観念のまとまり）を一つの言葉によって（一般観念として）固定し、言葉によって代理させ

てたやすく扱うことができるようになるのであろう。〈着眼点をさらに限定して抽象すると、動物、有機体、物体、存在の「一般観念 *idée générale*」を持ちうるだろう (ibid.)〉。

ボネはまた、例えば個別の思考、意志、行為から抽象によって、思考、意志、自由〔行為能力〕の一般観念が得られるとする。また、事物の状態と思考との関係からは、真・偽の一般観念が得られ、行為と幸福との関係からは、有効、善・悪、徳・不徳、正義・不正、完全・不完全、秩序・無秩序といった一般観念、さらに派生的に規則、法の一般観念が得られるとしている (13)。

こうした抽象的な知識は、その他の外的事物に目を向けることで拡大する。例えば、〈対象についてその実在だけに注目すると、単位 (*unité*) の〔一般〕観念⁽¹⁸⁾が得られ、それからさらに数の観念が得られる。この数の観念は、記号で表現される足し算や掛け算によって無限に増えていく。また、対象を部分の合成物とみなすことで、延長の観念が得られる。この延長の観念からさらに大きさ、運動の観念が得られ、延長と運動の観念から時間や速度の観念に至る (14)〉。〈物的諸存在 (*êtres corporels*) の多様性から分類の観念が生まれ、魂は実際に事物を上位区分から下位区分へと分類することになる (15)〉。さらに、〈自然の継続的变化からは、原因、結果の観念が得られ、ついには存在するものの第一原因 (*cause première*) 〔先行原因に依存しない原因で、通例「神」を指す〕ないし充足理由 (*raison suffisante*) 〔世界の秩序がかくある理由で、「神」がこの理由を体现する〕の観念にまで魂は上昇する (16)〉とされる。

ボネは「抽象」について以上のように大雑把に語るだけで、それぞれの一般観念の形成についての分析は不十分である。言葉の使用が抽象作用にどのようにかわるかについての検討も不十分と言わざるをえない。また、ボネの抽象の理論の立場からしても、自然界における原因と結果の観念から「第一原因」や「充足理由」の観念 (概念) に到達することは、他の「抽象」とは区別して、むしろ次に見る「反省」、「推論」等の機能と関連させて考えられるべきではなかろうか。このように疑問点も多い。

② 吟味 (*considération*)、比較 (*comparaison*)、

反省 (*réflexion*)、判断 (*jugement*)、推論 (*raisonnement*)

ボネによれば、言葉 (*termes*) の使用は諸観念を「固定 *fixer*」し、それらを「吟味する *considérer*」ことを魂に許す (17)。「いまだ言葉を使う (*articuler*) ことのない子供は対象相互を比較することはない」(8)とされ、「比較」も言葉の使用を前提として考えられている。一方、「反省」の機能が言葉の使用に基づくことは『心理学試論』では明示されないが、『魂の諸能力についての分析試論』で明確にされる (同書第16章 *Par. 259-262*)⁽¹⁹⁾。『心理学試論』においては、「反省」は、「ある観念が持つ諸関係を明らかにすることで、他の多くの観念を魂にもたらす」(20)とされている。そして最後に、「二つのあるいは多数の観念の間に見られる関係ないし対立の分節音〔言語〕による表

現」(強調引用者)が狭義の「判断と推論」である(8)。ただし、『心理学試論』においてボネはこれらの魂の機能も十分検討しているとは言えず、これらの機能相互をはっきり区別しているかどうかとも疑問が残る。

一方、すでに前節6で触れたように、同所で見た「欲求」と「決意」のメカニズムに、ここに見る「反省」に基づく「判断と推論」が加わることによって、人間の行為に向けての《意志決定》がなされるのだと思われる。

③ 「観念の恣意的かつ反省的な結合(8)」

「言葉を使うことで、魂は事情に応じた〔必要な〕配列を観念に与える。こうして魂は好きなように観念を扱うことができる」(17)。残念ながらボネはこのように簡潔に言及するのみである。ただ、〈言葉を欠いた魂においては、ただ感覚的な知覚がそれらが生じた仕方に起因する〔自然的な〕連関を持っているだけである(8)〉とされていたことを思い起こそう(本節の冒頭参照)。観念を自由に結合できるようになることで、魂は上に見た吟味、判断、推論を、事実についてのみならず、可能性の領域、あるいは想像の領域においても行いうるようになるのではないか。

④ 記憶(mémoire)

〈ある言葉の音や文字は関連する多くの観念を呼び起こすことができ、想起を容易にする(17)〉。こうした手段としての「恣意的記号〔それ自体〕を想起する能力」が「記憶」と呼ばれる(8)。〈名詞を使用することで、魂は自然界の無限に多様な事象をも混乱することなく記憶の中に整理することができる(15)〉。

最後に、ボネは言葉の使用によって切り開かれた魂の機能の発展を展望する。〈記憶、想像、推論は抽象的知識の増加につれて発展することだろう(14)〉。加えて、〈魂の諸能力の完成度は言語の完成度に対応する。そして、科学こそが言語を完成に向かわせる(17)〉ことだろう。ボネにとって、論理的な科学的言語こそが言語の理想であったのである。

すでに触れたように、ボネの「心理学」を特徴づけるものは、彼がその分析を生理学の基礎の上に打ち立てようとしたことである。彼は言語活動についても生理的基礎を与えようとしている。〈言語は観念を多様化する際、脳の運動を多様化する。何にせよ考える(penser à)場合、私たちは主題に含まれる諸観念の自然的ないし人為的記号(signes naturels ou artificiels)を表象(se représenter)せずにはいられない。これらの諸観念を表す言葉を心の中で(intérieurement)発せずにはいられない。こうしたことは脳に対して起動力が行使される結果である。すなわち、魂は対象を——対象の視覚像(image)を——表象し、それを示す言葉〔の発音〕をも同時に想起する。また、魂はこのとき対象の別の感覚をも想起する。(・・・)さらに反省は、ある観念が持つ諸関係を明らかに

することで、他の多くの観念を魂にもたらす。これらはすべて、〔魂の起動力によって〕脳に運動が引き起こされているのに他ならない(20)〕。ここで観念の「自然的記号」が何を指すのかは明確ではないが、対象の視覚像を指しているのかもしれない。いずれにせよ視覚が対象の表象の基本となっている。一方、言葉つまり人為的記号も一つの観念であり、結局、像も言葉もすべて脳内の対応する繊維が運動することで想起されよう。また、言葉を媒介に実現されるあらゆる観念の展開もおしなべて脳内の繊維に基盤を持つはずであるとされている。

言葉の使用とそれに基づく魂の知的諸機能については、『心理学試論』におけるボネの展開自体がきわめて不十分である。ただし、人を言葉の獲得へと導く原理としては「必要」とその「表現」が考えられていた(p. 66)。この「必要」の概念は、先に欲求に関連して見たように、「快」の概念に統合されえよう(p. 63)。一方、知的諸機能を実際に行行使する際には「魂の起動力」が発動されるが、何がこの起動力の発動とその方向を決定するのかという点については明確にされない。しかし、知的諸機能も「注意」の機能の行使を前提として実行されると思われ、先に見た「注意」自体の行使とその方向を決定する原理、つまり快苦の原理によって導かれていると推測することができよう。快には精神的快も含まれるが、この精神的快がここでは重要であるとも思われる。

さらに、人は快や幸福を持続的に志向する。ところで、即時的な快を超えて継続的に幸福であるための手段は、事物の間にある秩序ないし諸関係に従うことである。従って、人はその知的諸機能によって事物の間のある関係を見出し、そこに自然の法則を認め、それを自らの幸福のために守らねばならない。こうして、知的諸機能の個別の行使を超えて、人間の知的活動自体が、幸福への志向によって導かれていると言えよう。こうして問題は道徳論に関わってくるが、本論文ではこれ以上立ち入ることはできない⁽²⁰⁾。

VI. 魂の能力の限定へ

ここまで、観念に関わる魂の諸機能を、言葉の使用の段階まで跡づけてきた。「感覚」は魂の本源的機能として当初より《判断》をも含み、言葉をばねにこの知的能力は発展する。また、感覚から由来する諸観念それ自体は、脳の繊維に依存しつつも、魂自体の変様であり、魂固有の能力に基づくと考えられよう。一方、魂は起動力を持ち、〈ある観念を契機に、魂は起動力を繊維のつながりに沿って作用させ、他の観念を想起させる〉とされた(第Ⅲ節1参照)。さらに、今しがた前節の最後近くでふれたように、言葉を媒介とした観念の知的展開も、〈脳に対して起動力が行使される〉ことの「結果」であろう。

こうして、ボネは基本的には、魂に固有の能動性を認め、観念を生じさせる脳の運動を魂がその起動力によって引き起こすことができる、との仮定を採用している。だが、ボネとしても、魂の受動的側面を無視することはできなかった。例えば、身体の機能を媒介として実現されることから、魂の諸機能は身体や脳の機能の影響を受ける、とボネ自身考えている。身体の持つ「体質 *tempérament*」が、習慣などと一緒になって、魂にある「自然の性向 *penchant*」ないし「好み *affections*」を付与し、これによって魂はある種の対象や快をより好むようになる、と推測されている (43)。

観念の生成についても、ボネは、魂はあくまでも脳の運動に対して受動的にすぎないという可能性を示唆する。想起について言えば、「対象によって一度引き起こされた運動は脳の中で保存され、想起とは単に魂がこの保存されている運動に注意を払うことではないのか」(31) (強調引用者)。ここで、注意が依然として繊維に起動力を行使することであるとしても、それは想起において補助的役割を果たすだけであろう。こうした仮説の延長上には、〈脳を含む身体こそが、「観念を再生するだけでなく、さらに比較し、推論を形成し、想像し、あらゆる計画を実行する」のであり、魂は単なる観察者でしかない (32)〉という一層大胆な仮説が考えられる。

この仮説の可能性を検討するに当たって、ボネは、人間身体のあらゆる外的内的運動を力学法則に従って完全に模倣することのできる自動人形を仮定している。

〈この人形は外部からの印刻に対応して運動を実行する。対象の作用によって感覚器官 (*sens*) に生じた振動は脳に相当する部分に伝達され、対象の作用が人形の機能の保存に適合する度合いに応じて、対象への接近ないしは離反の身体運動を引き起こす。感覚の運動は脳において保存されるが、人形の状態によってその運動が強まることがある。〔するとその感覚が想起されよう。〕感覚間には緊密な連絡があって、一つの感覚器官に運動が印刻されると、他の感覚において運動が生じたり強まったりする。また、言葉も運動に他ならないから、その運動の多様さや組み合わせが、ふつう「精神」が行う機能であると考えられていた判断や推論の代行をする (*représenter*) (*ibid.*)。〉

〈こうした人形に魂を付与するとしよう。この魂は〔脳内の運動を含む〕身体の運動を観察し、自らが身体の運動の創始者 (*auteur*) であると確信し、さまざまな運動に際して意志を持つことになる。こうして人間ができあがる (*ibid.*)。〉

この仮説は、推論等のふつう精神の機能と考えられるものまで主に身体の運動に基づける点で極めて注目すべき主張である。しかし、『心理学試論』におけるボネは結局自らこの仮説を否定している。〈この仮説が魂から身体への〔異なる本質を持つ二実体間の〕作用を理解する上での困難を取り除くとしても、身体から魂への〔逆方向の〕作用を理解することの困難は相変わらず残される。また、私たち人間が自己の行為の創始者であると確信させる「自由」の感覚〔の正しさ〕にも反する (*ibid.*)〉とされる。

だが、『魂の諸能力についての分析試論』においては、ボネはこの『心理学試論』の仮説の方向、つまり脳の「運動」を重視する方向で理論を精密化しようとするようになる。〈脳に運動が保存されなければ、いまだ振動させられていない繊維は意志の動機となる観念を提供しえず、魂の起動力は動機なしに作動することになってしまう〉とされる（『分析試論』第18章、432-461, 500-501）。そして、〈『心理学試論』の著者は、身体こそが観念の再生や、比較、推論、想像、および計画の実行をなし、魂は単なる観察者でしかない、という可能性さえ認めえたのだから、彼は「観念の想起を脳の仕組みだけで説明することに困難を見出す必要はなかった」〉と語ることになる（『分析試論』459）。こうして、身体機能の分析を進めるなかで、魂と身体との協働における魂の役割が徐々に限定されていくことになるのである。

Ⅶ. 身体行為と無意識

魂の機能は第一に観念を持つこと、また観念のさまざまな変様形態を持つことであった。そして、ボネはこれらの現象が魂と身体との相互作用の上を実現するとしたのであった。だが、魂にはさらに意志に従って身体運動を実現する機能があるであろう。以下、この機能について検討することにしよう。

ボネはまず、機械的に見えるが魂の意欲 (*bon plaisir*) ないし意志に従っていると思われる諸運動を取り上げる (39)。

〈注意や反省が働いた形跡が見られない機械的行為の数は反省的行為の数を上回るほど多い。なにかの物体が突然近づいたとき私たちは目をつむる。眠って夢を見ながら私たちは実際に声を出して話をしたりする。覚醒時にも私たちは全く自覚せずに身体行為や知的行為（推理、瞑想など）をすることがままある。だが、こうした行為もその起源においては意志的で、魂がその原理であるはずである。魂は、快や必要や適切さやその他の明瞭であったり不明瞭であったりする動機によって決定されて、状況に適合する身体運動を意志し、それを実現するのだと思われる⁽²¹⁾。睡眠も魂の諸能力の行使を多少変更するだけである。夢の中でも魂は例えば意志（欲求）を持っている (39)〉。

だが、さらに反論がありうる。魂が特定の一連の運動を命ずる時は、ただ一つの包括的意志 (*volonté générale*) が働くだけではないのか。ここでボネは、物思いにふけりながら長く曲がりくねった小道を歩む一人の哲学者を例にとる (*ibid.*)。

〈[包括的意志によって] 一度動き始めたこの人の身体が、身体だけの働きで長い曲がりくねった道をたどったとは考えられない。この人は障害に出会うと即座に進行方向を変更する。こうした場合に、新しい身体運動は先行する身体運動によっては決定されず、それ故この運動は単に機械的ではありえない⁽²²⁾。自発的原理 (*principe*

soi-mouvant)、つまり魂が外界からの印刻に応じて運動を指示しているはずである。ただし、この場合も魂は自らの働きをほとんど意識していない。この哲学者は自分が何も見なかったようにすら思うだろう。だが、彼の魂は視覚器官を通じて確かに周囲の対象を知覚し、それによって身体の向きを変えたはずである。その場所と彼の安全との関係についての判断も行為の決定には働いていたはずである (ibid.)。

こう主張しうる根拠を順を追って見ることにしよう。まず、ボネは「知覚」にはほとんど自覚されない弱いものがあることを例を挙げて説明している。「読書をしながら、私たちは言葉の意味にだけ注意が向かい、言葉を構成する文字にはほとんど注意が向かわない。だが、私たちは文字の知覚を有している。というのも、言葉の知覚も、言葉に結びついた観念の知覚も必ず文字の知覚に依存しているからである」(ibid.)。どんな瞬間にも私たちは実は注意の向かわない多くの弱い知覚を持っている。問題の哲学者の場合には、〈彼の注意は思索から得られる観念の方へと集中している。魂は知覚それぞれの強さや意義の程度に応じて注意を向けるからである (ibid.)〉。他方、哲学者の「周囲の対象の知覚は(・・・)あたかも哲学者の魂の表面をかすめるだけなのである」(39)。とはいえ、〈不注意の状態も外界から受けた印刻の知覚を消してしまうわけではない。ほとんど気にとめなかった対象も、考え始めるとかなり詳しくその観念を再現できる (40)〉のである。

〈哲学者の「魂が身体に伝達する諸運動」の知覚 (sentiment) もまた最も弱い知覚の部類に属する。「注意〔の発動〕は、個体の保存と安楽に対しての対象の密接性ないし重要性に比例する」から、それらに直接関係しない身体の運動には魂は注意を向けず、その「単なる知覚 simple sentiment」を持つだけである。この知覚は身体運動の状態が特に悪化していないことを示していればよい。哲学者が平坦な道を思索しながら歩んでいる場合がこれに当たる。

〈周囲にも自らの身体運動にも注意を向けない哲学者の歩みも乱れることがあるが、これは魂の内ですさまざまな観念が生起することに影響されたものと考えられる。観念とは無関係のはずの身体運動に観念が影響することこそ、魂が身体運動を生むためにもつねに作用していることを示している。

〈さて、予期せぬ危険や障害が出現するとしよう。一般に魂は危険の知覚 (sentiment) を持つと、不可避的にその危険を回避したいと欲し、そのために身体行動をなす。この行為は欲する目的のための手段であり、当然自覚されるはずのものである⁽²³⁾。哲学者の場合では、魂の活動は〔自らの安全に係わる〕障害の知覚にも振り向けられることになり、次いで運動が変更される。だが、こうした場合、魂は極めて敏速に知覚、判断、起動をなすので、これらは区別されず、結果である身体の動きだけがはっきり感じられることになる (40)〉。

こうして、ボネはいわゆる無意識の領域に踏み込んだ。それを可能としたのは、繊維の運動の理論の上に立てられた「弱い知覚」と「注意」の理論であった。前世代のライプニッツは「微小表象 *petites perceptions*」の理論によって、形而上学的観点からこの無意識の領域に踏み込んだが、ボネは、18世紀にあって、この領域へのより経験的具体的接近の道を示したのである。

むすび

以上、筆者は、『心理学試論』において、人間の魂とその諸機能がどのように捉えられたかを検討した。確固たる感覚論者であったボネは、『心理学試論』においてより、魂のあらゆる機能は「感覚」から発展するものと考えていた。この「感覚」は魂の本源的功能であり、「判断」をも含んでいた。言葉を換えれば、「感覚」と「知性」とは一つの能力をなしていた。そして、この知的能力は言葉をばねに発展する。

ボネによれば、知的能力の発展には言葉が決定的な役割を果たす。この言葉の獲得へと人を導く原理としては「必要」が考えられた。この「必要」の概念は「快」の概念に統合されよう。一方、知的諸機能は「注意」の機能の行使を前提とすると思われ、結局、知的諸機能の行使は「注意」自体の行使を決定する原理、つまり「快」によって導かれていると推測できる。さらに、人は快や幸福を持続的に志向するので、そのために知的諸機能を発揮して事物間の関係を見出し、それを自然の法則として守ってゆかねばならない。結局、知的諸機能の個別の行使はもとより、人間の知的活動自体が、快と幸福への志向によって導かれていると言えよう。こうして、ボネは「快」を人間の活動の原理と見なし、感覚論の一般的特徴と軌を一にしている。

ボネの感覚論は、精神活動への身体的要素の関与に注目した点で、コンディヤックには見られない特質を備えている。魂と身体とは協働するものと考えられ、魂への接近の有効な手段として、身体および脳の機能の分析が進められた。18世紀において、ラ・メトリ、デイドロらが、唯物論者ではありながら、脳の構造や機能に有効な分析を加えたとは言えないのに対して、ボネは非物質的な魂を想定しながらも、脳の機能の分析の先駆者となった。そして、魂を非物質的実体とすることの可否は別として、ボネの人間精神の活動の分析は、無意識の扱いなどしばしば鋭いひらめきを示している。

一方、身体と脳の機能の分析が進むなかで、魂自体の役割は徐々に限定され、その神秘的性格は失われていく。ボネは、魂は起動力を持ち、その行使の判断も下しているとの考えを持ち続けた。だが、この起動力やその行使は、行使の対象である脳や身体の機能によって逆に規定されることになった。その結果、脳や身体の分析から、魂の能力に対する接近が可能となったが、同時に、魂は魂に固有のものと考えられてきた能力――

想起をはじめとする観念の生成の能力——の一部を脳や身体に譲り渡すことになった。続く著作『魂の諸能力についての分析試論』においても、魂を脳との相互関係において捉える視点に変化はない。そして、脳の運動が重視され、魂の役割が限定される方向はよりはっきりすることになる。

分析の方法について言えば、『心理学試論』は、繊維の仮説などを採り入れつつ人間精神の経験的現実の分析的記述を試みたが、演繹的性格は強くはなく、いわば魂の働きの「現象学」に相当しよう。この後、ボネは『分析試論』において、この「現象」の生成を解明すべく、一つの感覚観念から出発して、多様な精神（魂）の活動を順に演繹してゆこうとする。魂の諸機能を脳の機能との関係において考察する視点に変化はないため、魂において一つの感覚観念から多様な精神現象が発展するのに対応して、脳においては繊維の運動から脳の機能の発展が考察されることになる。

「心理学」関係2著作におけるボネによる人間精神の分析は、コンディヤックのものと並んで18世紀感覚論の到達点をなしている。ボネおよび18世紀の感覚論のより深い理解のためにはさらに、ボネの『魂の諸能力についての分析試論』の検討、ボネの思想とコンディヤックら他の感覚論者の思想との比較、それを通しての唯物論も含めた18世紀思想の中への感覚論のより正確な位置づけ、などに向かう必要があろう。

注

- (1) 2著作の原題は次のとおり。

Condillac, Etienne Bonnot de: *Essai sur l'origine des connaissances humaines*.

Condillac, Etienne Bonnot de: *Traité des sensations*.

- (2) 筆者はシャルル・ボネについてこれまでに以下の論文を発表した。

- ・「シャルル・ボネの転生論 [新生論]」(日本フランス語フランス文学会『フランス語フランス文学研究』第39号、1981年、pp. 21-31)。
- ・「シャルル・ボネの有機体論」(東京都立大学人文学部『人文学報』第151号、1982年、pp. 147-173)。
- ・「シャルル・ボネの自由論」(『東京都立大学仏文論叢』第1号、1984年、pp. 179-238)。
- ・「18世紀自由論への一視座——シャルル・ボネを中心に——」(日本18世紀学会『学会ニュース』第17号、1985年、pp. 4-16)。
- ・「シャルル・ボネの道徳論」(宮崎大学教育学部『人文科学紀要』第68号、1990年、pp. 27-45)。
- ・[Iino (Kazuo):] *"La Palingénésie et la liberté de l'homme chez Charles Bonnet"*, Thèse pour le Doctorat de Troisième Cycle, Université de Paris I, 1987 (Dactylographiée, déposée à la bibliothèque).

ボネの思想の全体像については上掲「シャルル・ボネの道徳論」の注(2)、(5)を参照のこと。ボネに関する書誌についてもこの論文を参照のこと。

- (3) 2著作の初版は次のとおりである。
 Bonnet, Charles: *Essai de psychologie*, Leyde, 1754.
 Bonnet, Charles: *Essai analytique sur les facultés de l'âme*, Copenhagen, 1760.
- (4) Bonnet, Charles: *Oeuvres d'histoire naturelle et de philosophie*, Neuchatel, 1779-1783, 18 vol. in-8; 10 vol. in-4.
 『心理学試論』は1783年に、『著作集』（8つ折り版第17巻、4つ折り版第8巻）に収録された。一方、『魂の諸能力についての分析試論』は1782年に、8つ折り版第13、14巻、4つ折り版第6巻として収録されている。
- (5) 筆者は注4に掲げた『著作集』の8つ折り版をテキストとして使用した。また、以下のリプリント版も随時参照した。*Essai de psychologie*, réimpression de l'édition de 1755 (Londres), Olms, 1978; *Essai analytique sur les facultés de l'âme*, réimpression de l'édition de 1760 (Copenhague), Olms, 1973. なお、本論文の本文中での引用は『心理学試論』に限定し、『魂の諸能力についての分析試論』からの引用は注で扱うこととする。本文中での『心理学試論』からの引用の指示は、論述の最小区分である「章」を示すにとどめる。版によって異なってくるページの指示は必ずしも有効ではないと思われるからであり、ボネは章を細かく区分しているのので、これで検索の役に立ちうと思う。
- (6) ボネは「自由」に狭く限定された定義を与えている。すなわち、「魂の持つ起動力、魂が思いどおりに身体器官に行使するあの作用が自由である」(42)。より簡潔に言えば、「自由とは行為する能力である」(51)（いずれも強調は引用者）。ボネはこの定義を『魂の諸能力についての分析試論』など以後の著作でも一応保持している。他方、決定論や人間の道徳的責任との関係で問題となるいわゆる人間の《意志の自由》についても、ボネの態度を問題にすることができる。こうした点については前掲拙論「シャルル・ボネの自由論」、「18世紀自由論への一視座」、また「シャルル・ボネの道徳論」注13におけるまとめを参照のこと。また、本論文注16も参照のこと
- (7) ボネが物質（物体）の性質をどのように考えていたかは微妙である。唯物論批判の一連の議論の中ではっきり物体の属性(attribut)とされるのは「延長、固さ、慣性力」であり(36)、「可分性」や「運動」もそれらに準じて魂の諸属性と対比されている(35)。だが、「重力、運動」はここに見るように物質の「力 force」とされるものの、属性と呼ぶことは慎重に避けられているようにも見える。付言すれば、ボネはニュートンの引力理論の影響を受け、「運動」や「重力」を物質に内在的なものと考えていた。
- (8) 「今日、私たちは事物を私たちとの関係において探究する」(36)とボネは一般的にその現象論的相対論的立場を表明している。
- (9) 『心理学試論』のボネは、感覚(sensation)と知覚(perception)についてその違いを明確にはしていない。『魂の諸能力についての分析試論』に至るとボネは次のように語ることになる。「知覚はただ〔脳の繊維の〕振動の度合いにおいて感覚と異なる。知覚は(・・・)対象の単なる把握(appréhension)であり、ただ対象が現にあることを示す。振動が増大すると知覚は快不快を伴うようになり、そのとき知覚は感覚となる」(*Essai analytique*, ch. 14, par. 196)。感覚(や知覚)と観念の関係についても、『心理学試論』では明確にはされないが、『分析試論』

では次のように語られる。「観念(idée)という語は、その最も広い意味においては、魂によって意識されている魂のあらゆるあり方(manière d'être)を指す。(・・・)この語は場合によって単なる感覚を意味したり、概念(notion)を指したりする」(par. 194)。

- (10) この点について『魂の諸能力についての分析試論』では次のように語られる。

「脳のある種の繊維の運動がどのように私の魂に観念を生じさせるのか私が知らないとしても、私は少なくとも、脳のある種の繊維に生じる運動の結果としてのみ私が観念を持つということをよく知っている。だから、私はこれらの繊維とその運動について考える。私はこれらの繊維を諸観念の自然的記号〔対応物〕と見なす。私はこれらの自然的記号や、それらの可能な結合の結果を研究する」(*Essai analytique*, Préface)。『分析試論』において、ボネは要素としての感覚観念から多様な精神現象を演繹的に導出しようとするが、それに身体面で対応するものとして、要素としての一繊維の運動から脳の機能を考察した。松永澄夫「シャルル・ボネの『立像』のフィクション(上)」(関東学院大学文学部『紀要』第23号、1978年、pp. 79-107)(下は未刊) p. 83を参照。

- (11) 『魂の諸能力についての分析試論』でも次のように語られる。「私たちは五つの感覚機能(sens)を持つが、そこから五種類の感覚が生じ、これらの感覚はそれぞれ無数の種類を含んでいる。したがって神経やそれに結びついた動物精気(esprits)には、私たちの感覚に見出される多様性に見合った多様性がある。この物質的な多様性のあり方に到達する手段を〔現在の〕私たちは持っていない。私たちのなしうるすべては、この点についていくらか推測して見ることだけである」(*Essai analytique*, ch. 5, par. 32)(強調は引用者)。なお、神経繊維(感覚繊維)の内部には、脳で精製された「動物精気 esprits [animaux]」が満ちて流れている、と考えられた(*Essai de psychologie*, ch. 1)。なお、繊維の機能が論理的に要請されていることについては、前掲松永論文(注10参照) p. 95を参照のこと。松永氏はシャルル・ボネにおいて、心的事象の「心理学的」経験が先行し、それに基づいて「生理学的身体概念」が構築されるという「逆説」が認められることを指摘している。また、ボネにおいて科学一般が実験科学としての自立を果たしていないことについては、拙論「シャルル・ボネの転生論」、「シャルル・ボネの有機体論」を参照。

- (12) 本論文 p. 59 の引用参照。視覚においては、七基本色に対応する異なる繊維があると考えられていた。

- (13) 本論文 p. 69 (第V節末尾) 参照。

- (14) 『魂の諸能力についての分析試論』においては、非反省的行為について、〈行為(ないし対象)の感覚——比較〔=判断〕——一方の行為(ないし対象)への好み(préférez)——決意(se déterminer)——行為への欲求(désir)の形成——行為の実現〉というやや異なった図式が示されている(ch. 19, par. 479-483)。

- (15) この「欲求」と「決意」に「反省的な判断」の加わった《意志決定》の場面において、人間の《意志の自由》や《道徳》が問題とされる。ここで、ボネの自由論には立ち入れないが、ボネが「欲求」や「意志」には決定の原理があると認めていること、後に見る「反省的な判断」も判断の主体と対象との関係によって規定されるであろうこと、これらのことからボネが基本的には決定論者であることが分かって来よう。その中でボネはまず、注6で見たように「自由」を原則的に「魂の持つ起動力」と解して、決定論との両立をはかった。しかし、後にボネは、人間の自覚的選択に基づく行為を「自由」な行為と見て、人間の道徳的責任をも明確にする

- に至る。こうした点については、本論文注6にかかげた拙論を参照のこと。
- (16) 『心理学試論』においては、「単純観念」、「複合観念」の語はこの箇所で見られるのみで、ここに示す以上の説明は与えられていない。『魂の諸能力についての分析試論』では次のように語られる。まず、単純観念について。「対象の印刻の単なる結果であるこうした魂の変様のうちに、単一の印刻に対応しているために魂の力によって〔他の観念へと〕分解しえないものがある。これが単純観念であり、あらゆる可感的性質の感覚がそれである。(・・・) 延長、固体性、慣性力、運動などの知覚もやはり単純観念である。(・・・) 単純観念は他の観念へと分解されえず、「定義」することはできない。定義とはある主辞が含む諸観念を枚挙することだからである。とはいえ、ある単純な主辞が作用を持つならば、その作用(action)によってその主辞を定義できる。こうして、〔単純観念として現れる〕力をその働き(opérations)によって定義できる」(第14章、202)。複合観念について。「一つの感覚機能のいくつかの種類の繊維、いくつかの感覚機能のさまざまな種類の繊維が一つの物体によって同時に振動させられる時、(・・・) 対応する感覚は複合されている。(・・・) これが複合観念である。(・・・) 個々の具体的な物体を表示する表象(perception)は個々の具体的な〔複合〕観念である」(205)
- (17) 判断については、〈魂がある変様(観念)から他の変様へと移行する際に感じる変化が小さければ、両者は同等であるという肯定的判断となる(38)〉という解釈も考えられよう。だが、〈観念から観念への移行を知覚するためには、先行する観念のなんらかの感じを保持していなければならず(ibid.)〉、これは完全な移行とは言えない。結局、ボネにおいて、判断とは同時に存する(現に知覚されているか再現されたかした)複数の観念の重なり具合の知覚であったと思われる。
- (18) 以下、本引用中の「観念」は、すべて厳密には、抽象によって得られる「一般観念」を指す。ボネは「一般観念」を単に「観念」とする場合が多いが、そのほか「概念 notion」の語を使う場合もある。ボネの用語法は厳密ではないため、ここでは「観念」の訳語で統一した。
- (19) 『魂の諸能力についての分析試論』においては、「反省(内省) réflexion」について次のように語られる。〈感覚観念に働きかけて、精神は諸概念を獲得する。この操作が反省である。精神は感覚観念に注意を向け、それらに記号ないし言葉を付与し、それらを比較する。一般にこの結果が反省である。反省によって、精神は対象の作用の諸結果から、対象の性質の概念を演繹する。反省の身体的基礎は、各種の感覚観念やそれを表示する記号に適合した繊維に対して魂が発揮する起動力に存する(第16章 Par. 259-260)〉。こうして「反省」によって新たな観念(概念)が獲得されるので、「私たちの観念は、感覚(sens)と反省の二つの源泉を持つ」(Par. 259)とされる。これは、言うまでもなくロックが『人間知性論』で表明した立場でもある。だが、ボネは感覚論者として、「反省」の機能も言語を媒介として感覚——それ自体知性と一つになった豊かな概念である——から導き出すのである。
- (20) この点については前掲拙論「シャルル・ボネの道徳論」を参照のこと。
- (21) いわゆる「反射」による身体運動の場合は、その過程があまりに敏速なので意識されないのであろう。本節の最後の引用箇所(第40章)参照。
- (22) 一定の力学法則の下に、先行する運動によって次の運動が決定されるのが、言うまでもなく「機械的運動」である。
- (23) 自らの行為の自覚については次のように語られた。「魂が作用〔起動力〕を働かせる場合、そのことを意志し、知っている」。「腕からの脳〔そして魂〕への反作用によって、魂は腕を動

かしていると感知する (sent)」(41)。本論文、p. 57 参照。